

モロッコ指導者研修レポート

2011.8 静岡県指導者養成委員会コーチングスクール（CS）

参加者：

岡田秋人（CSマスター）

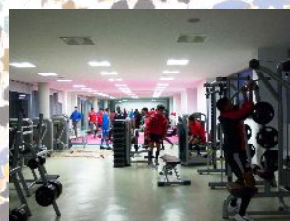
増田雄也（CS、掛川工業高校）

古杉仁志（4種トレセン部長）

本田忠勝（中東部4種技術委員長）

小林公平（CS、湖西高校）

池谷 考（指導者養成委員長）



I. はじめに

池谷 孝（研修主任）

■モロッコ・フランス指導者研修の成果

モロッコはワールドカップにも出場していますが、選手育成や指導者育成に関してはこれからの国です。かつての宗主国であるフランスのサッカーやフランス人の指導者がモロッコサッカーの主要なポジションに立ちモロッコサッカーを変えようとしています。2009年に国王の肝いりでラバトにモロッコサッカーアカデミーが作られてからモロッコはまさに今選手、指導者育成の黎明期を迎えようとしているように思います。サッカー環境や組織、国民の経済的豊かさは日本の比ではありませんが、それぞれが学ぼうとする意欲をひしひしと感じた研修でした。

今回の研修で、指導する上で私たちが置き忘れてしまったものや新しい価値見つけることができたのでしょうか。

事前に50枚ほどのフランスサッカー関係の資料の研修、テクニカルレポートの作成についての簡単なレクチャーをして研修に臨みました。モロッコでは深夜まで6人でその日の研修についてディスカッションをしました。

果たして成果はあったのでしょうか。帰国後、提出された5名のレポートを編集しながら拝見しました。それぞれの方に内面に深く迫る気付きを多く見つけ研修の成果を確認できました。それらの「見つけたもの、発見したもの」をぜひこれを読まれる指導者のみなさまにも共有していただき、それぞれの方の指導上の問題解決力を向上させる一石になればと願います。すべてはよい選手を育て、よいサッカーをするために。

II. 報告

▶ 学ぶことは変わること…行く、見る、知る、学ぶ、活かす

発見したもの

▶コンペティティブ（Competitive）な選手を育てる

競争力の果たす意義を曖昧にしている。競争心にあふれた選手や競争力を刺激する指導が必要。トレーニングで、ゲームで、あるいはサッカー以外でも。競争心を発揮することは選手の能力の大きな柱。コンペティティブな選手こそ戦える。「メッシはどんな相手、味方でもいつもメッシのサッカーができた」という言葉が言い当てている。

見たものの再発見したもの

▶「サッカーをする」選手を育てる

ボール扱い上手、ゲーム下手をどうするか。日本サッカーの育成システムや組織の力で育成の課題を解決するのか、選手が「サッカーをする」ことで解決するのか。子どもたちに「サッカー」をさせなければいけない。

▶よいサッカーをする・・・よいサッカーをして勝ちながら個を伸ばす

育成か勝利かの議論ではなくよいサッカーをすることを指導者・選手が共通の哲学にする。よいサッカーとは、やって楽しいサッカー見て楽しく魅力的なサッカー。教わる方も教える方も楽しいサッカー。たとえば、①全力で戦い相手に勝つ②内容で相手に勝ち③攻撃的に戦い多くの得

点を奪って勝つ④攻撃し続けるためにより多く奪うサッカー。やって楽しいサッカー。

▶サッカーは、見て考え、止めて蹴って走りシュートするスポーツ

その局面のボールの置きどころ、ボールメッセージ、ボールを受けるメッセージ、賢くたくさん走る、シュートの匂いを嗅いだら打つ。

▶ひとりひとりに気づきを与える

いつもいつも全体に指導、では個々の意識や集中力は高まらない。

▶ひとりひとりをうまくすればチームは強くなる。

大会に勝つための戦術やチームづくりから指導に入るとひとりひとりの技術の向上は置いていかれる。ひとりひとりの育成こそがサッカーの課題を解決する最善の方法だと考える。ひとりひとりに目を向け気づきを与える指導こそ。

▶あたり前のことをあたり前に・・・フランス対クロアチア戦をみて

止める（ボールの置き場所）、渡す（メッセージパス）、走る（適切にすばやくエネルギーに）、動きながらあるいはすべては味方の動きに合わせてミスなくよどみなく。個人の特徴を生かしながら組織的に戦う。どちらも欠かせないクオリティ。

▶発掘の重要性

すべての根源。個人的に発掘、組織的に発掘する。かなり日本は遅れている。タレントを追跡する仕組みから育成の成否や課題について学ぶことをしていない。

▶指導者は、教育者でありサッカー指導の専門家

知っている・わかる・できる。何でも知っていてできる人。経験のなせる技であり、多くの学びから得られた指導のクオリティが直感やひらめきも可能にする。

指導者の「無知の知」、「ラーニング（Learning）とアンラーニング（Unlearning）」

▶教育の重さ（PEDAGOGY）

一人前の人間に育てる。メンタリティを育む・・・脳（Brain）、ハート（Spirit）。サッカーはサッカー選手がするスポーツではなく人間がするスポーツ。人生はサッカーだけじゃない。

考えさせられたこと

▶テクニクとは何か

TECHNIQUEの解釈は違う、日本とそれ以外で、あるいはあなたと私で。答えはひとつではない。ボールテクニク、ボールなしのテクニク、ゲームテクニク、攻撃のテクニク、守備のテクニク、スピードの中でのテクニク、プレッシャーの中でのテクニクなどなど、曖昧にしがちだが指導者がそのトレーニングに要求されるテクニク、ゲームでのテクニクがなんであるか知らなければ教えられない。

▶テクニクをどう教えるか

見せて教える、システムチックに繰り返し練習させる（ドリル）、ゲームで評価する。指導者はリアリティあるデモを行わなければならない。

▶ゲームシチュエーショントレーニングの大切さ

選手の失敗を失敗で終わらせない。経験を与えること、反復すること、復習することは「問題解決能力の基礎。シチュエーションにこだわるのがサッカーのクオリティを向上させる。

▶判断は教えられるか

今回は一度も「判断」という言葉を聞かなかった。シチュエーションの経験を与えること、反復すること、復習すること。できるだけ多くのシチュエーショントレーニングとは、たとえばゲームで見られた個人やチームの課題の場面を切り出して行うもの。ある場面の経験をトレーニングで積めばゲームのその状況での個人的集団的課題は克服できる可能性を持つ。その経験は「直感」や「ひらめき」に結び付く。

▶問題解決力

指導者の必須の資質。果たして自分はトレーニングで的確に、ゲームで瞬時に問題を解決できるか。自問自答。

▶個人主義、集団主義・・・個の育成とチームの育成

選手が小さいころから個人としてやってきたサッカーを組織の中で生かす難しさ。選手が組織としてやらされてきたサッカーから個人のサッカーを出させる難しさ。

▶自分自身の中でのサッカーの哲学・文化の構築・・・指導者の向かう道

学びの結果、基礎基本をしっかりと持った上で独自性、サッカー観を構築していく。指導とは洗練されたオリジナリティに向かう道。

▶魔法のトレーニングなし

最善のトレーニングはあり。繰り返し辛抱強く、そして効果的なトレーニングこそ。

▶味方の近くにおいて距離感を保ち無駄なくサッカーをすること

トライアングル、よいポジションからよいタイミングで動き味方同士でよい距離感を保ちながら攻守にわたって効率的にサッカーをすること。

▶選手のポジションのスキルをだんだん上げる

18歳から逆算する。完成に向けた道から逆算する。12歳ではポリバレンタ選手だとしても18歳ではポジションのスペシャリストになっている道。

▶ゲームが続くと個の技術やチームの戦術のディテールがぼやけていく

トレーニングとゲームのバランス。マッチ・トレーニング・ベターマッチの繰り返し。

聴いたもの

▶指導者が自分のビジョン（サッカー観・ゲーム観）を持つこと

◇MR. アンドレ・メレルの分析

- ①守備の連係・・・お互いのポジションの確認と距離を一定に保つこと
- ②つるべの動き
- ③サイドを突破された時のセンターの選手のカバーリング
- ④マークの原則
- ⑤抜かれた後の抜かれた選手の守備
- ⑥サイドDFの攻撃参加・・・味方MFの動きを見てスタートタイミングを決める
- ⑦MFの連係・・・お互いの動きを見てカバーしあう
- ⑧ショートコーナーに対する守備・・・ボール局面を同数にするのか否かを決断する
- ⑨連係のモデル・・・2FW、2DMF、2DF
- ⑩攻め急ぎすぎる・・・速く攻めるのが悪いのではない。奪われてチャンスを失う。

▶言葉の力、信念の力

ラファエル（WACカサブランカTD）の哲学

「昨日よりうまくなる、明日よりはうまくなってはいけない」

「指導者は何歳になっても学ぶもの」

トカリ（前アルゼンチンTD）の哲学

「選手も指導者も一日一日何かを学ばなければいけない」

オシムの言葉

「今日の結果よりも明日のプレーを楽しみに待つこと」

（文責 池谷 孝）

➤ モロッコ・フランス研修での気づき

小林公平（CS、湖西高校）

■「百聞百見は一験にしかず」

今回の遠征では本当に多くの経験をする事ができた。異国のサッカーや文化を肌で感じること、指導のエキスパートと対談することは私にとって大きな刺激となった。情報社会の現在、世界の最先端のサッカーや文化を誰でも簡単に知ることができるという意味では今回の遠征では目新しいことは少なかった。しかし、実際に経験することは私が思っていたよりも刺激的で、迷いが晴れる思いがした。この経験や感情を一過性のものとせず、決意と情熱をもって今後の指導に必ず生かしていく。

■「勝つこと」ではなく「良いサッカーをして勝つこと」が重要

今回の研修で私にとって大きかったものは、育成のエキスパートのフィロソフィーを体感できたことだ。彼らは自分の考えを確立しており、彼らが自信を持って断言している姿は刺激的だった。

長期的な視野に立つことや育成の大切さは十分に理解していた。しかし、いまひとつ実感はなく、目の前の勝利に走ることが多かった。目の前の勝利こそが選手や自分の価値を高めるという思いがあった。しかし、研修を通じて、「良いサッカーをして勝つ」、「良いトレーニングをする」ことの大切さを改めて感じた。短期的にしか考えられずいたのは、自分に自信と経験がない証拠だと思った。そして、それが選手の成長や未来の妨げにさえなっていたのだと思う。選手の課題を指導者がどういった視点でとられ、個人に気づきを与えるかが重要であると実感した。数日では「技術」は改善できない。故に、粘り強さと長期的視野がこれには欠かせない。「常に良いサッカーをして勝利しよう。」これが育成年代において目指すべき姿だと思った。指導者として常に学び続け、良いサッカーを探求し続けることで自分のフィロソフィーを確立していきたい。

■情熱、教育的愛情と仕事のディテール

育成のエキスパート達からは、サッカーに対しての非常に強い情熱を感じた。日々のトレーニングやサッカーに対する仕事の積み重ねが彼らを作り上げていることが感じられた。「プレーヤーファースト」という言葉やその大切さは日本でも語りつくされている。しかし、実際に実践している人を間の前にし、その大切さを思い知らされた。そのフィロソフィーが彼らの仕事のディテールを高めていると感じた。責任は指導者にあると明言し、選手の心理的変化や家庭環境にまで神経を使っている姿はまさに教育者そのものだった。また、選手評価ひとつをとっても、ディテールは高く、選手ひとりひとりを改善し、成長させていこうという考えが明確であった。きれいな事ではなく、本気で理想を実践している姿は刺激的だった。

■湖西、PSG、モロッコアカデミーでも変わらないもの

サッカーはどこにいてもサッカーであった。選手の課題をみつけ、トレーニングに落とし込

み、個人をみつめ、個人を伸ばす。これはどこにいても変わらなかった。今回の研修で学んだことを活かし、目の前の選手を伸ばしたいという想いが一層高まった。一人でも多くの選手に良いサッカーのトレーニングを積ませ、成長させていきたい。

増田雄也（CS、掛川工業）

■どこにもサッカーは存在する

これまでにサッカーを通じて何度か海外に行かせていただきましたが、今回の遠征で改めてサッカーの大きさ、深さを感じることができました。首都ラバト空港に着いたときに感じた空気や、街の様子、市場の様子からは、モロッコのサッカーについて全くイメージできませんでした。しかし、街を走れば浜辺でサッカーをする様子、ラバトのアカデミーやWACカサブランカでサッカーに取り組む選手・コーチを見ることができました。どんな環境にもサッカーはあり、空港を降りた時には考えられなかったサッカーに対する情熱がありました。「この国に、こんなサッカーがあるんだ」というのが正直な感想でした。また、フランス上空から見た街には、芝生のサッカーグラウンドがまさしく無数に見ることができました。（成田上空からはたくさんのゴルフ場を見ることができました…）サッカーは世界中の人に愛され、そして追求されているスポーツだと改めて感じられた気がします。

■良いサッカーをする、ということ

研修中、何度も繰り返され、共感できたこと。それは、サッカーの指導において大切なことは「良いサッカーをする」ということ。そのために、「良い選手を育てる」ということ。そして、私たち指導者は、そのための「技術を教える」ということ。「選手に気づきを与える」ということ。それには、選手の国籍・レベル・性別に関係なく、いかに個人をしっかりと見ることができかが大切になってくること。その指導においては、選抜の選手であれ、掛川工業の選手であれ、考え方は変わらない。常に昨日より今日、今のプレーよりも次のプレーを改善させる気づきをいかに与えられるかが指導者にとって大切なことだと再認識させられたこと。今回の研修で、よりサッカーをシンプルに、指導をシンプルに考えられるようになったことが一番の収穫だったように思います。

■昨日より今日。しかし明日以上ではない。

WACカサブランカ、ラファエル・ハミディ氏が自身の指導哲学として初めに語った言葉。昨日より上手くなること。しかし、まだまだ上があるということを常に頭においているという共感できた言葉。私自身、それから選手にも常に要求していきたい言葉でした。

■メンタリティーの弱さ

静岡県選抜U-16は、モロッコで3試合・フランスで1試合を行った。どの試合の印象も一言でいえば「戦えていない」だった。攻守にわたって球際に弱い、少し環境（グラウンド・相手）が違えば技術（ボールを受けること・置くこと・蹴れること）がブレる。県選抜の試合は、相手と何が違うのか、が見えてくるよりもメンタリ的に戦えていない部分が大きく、少しがっかりした。かつてバルセロナや横浜フリューゲルスでも指導したカルロス・レシャックの「メッシはいつでもどこでもメッシのプレーができる」という言葉が重く感じられました。

■感謝

今回の研修は、県サッカー協会の方々や、国体に向けた強化遠征には不要な存在ながら帯同させていただいた廿日岩監督はじめチームスタッフの方々の御協力で行うことができました。中でも、研修の中では池谷さん・岡田先生と10日間を過ごす中で色々な話ができ、自分にとっては今までにない本当に有意義な研修となりました。

自分にとってはチームを離れることだけでなく、東日本大震災や、それにとまなう原発事故

が連日伝えられる中での出発となり、不安がありましたが、そんな中だからこそ精一杯学んでこようという気持ちで参加させていただきました。モロッコサッカーを肌で感じる事ができ、いかに日本でサッカーの指導ができる自分が恵まれているかを知ることができました。そして、だからこそより良い指導を目指さなくてはいけない、自分は負けていけない、という気持ちになれました。今回の研修のお礼をする唯一の方法は、より良い選手を育てること、より良いチームを作ることだと考えて、日々の練習に取り組んでいきたいと考える。本当にありがとうございました。

➤ 国家プロジェクトとしてのモロッコ国立フットボールアカデミー

■モロッコアカデミー概要

- ・国王の命により、サッカー強化のために、ラルゲェ氏がフランスから招かれ、アカデミーの設立からすべてを任された。
- ・2009年度から開始。モロッコ全土から選手の発掘。(ラルゲェ氏自身が、2年で12歳～16歳の選手、計15,000人を見て、その中から60人をリストアップした。2年間に4回のテストを行った。テクニック、フィジカルクオリティ(持久力プラススピードもしくはパワー、体の大きさ)、メディカル後を通して37名を選考した。
- ・保護者との学校、サッカー、生活の約束もあり。個々の選手の詳細なデータ(カルテ)を保管している。
- ・現在では、選手53名に対して、コーチ・教師・コック・清掃員まで含めた子供たちに関わるスタッフは80名に上る。「一番大切なのは子供たち。それぞれの持ち場でプロフェッショナルな仕事をしてほしい」ということを要求している。モロッコが過去20年間指導者育成を行ってこなかったのでメインのサッカー指導者はフランス人の4名。
- ・学校、生活など保護者との約束事も取り決めている。
- ・それぞれの育成選手の詳細なカルテを作成保管している。

■モロッコアカデミーのトレーニング

U-12では楽しみ、勝って終わるゲーム、コンペティティブ、ゲームの合間に競争心を育むような競争型のトレーニングを入れる(ATRIER)。U-13では技術の反復練習を行いながら厳しさ、集中力も要求する。

■スクール概要

対象年齢：5歳から12歳

年会費：1800DH(日本円で約18000円)・・・会費を安くしないと才能ある子どもが通えない。

練習回数・時間：週3回(水・金・土)、一回の練習は約75分

セレクション：なし

レベル：普及レベル

クラス分け：4クラスに年齢でクラス分けをしている。

- ・5歳から7歳・・・「目覚め」
- ・8歳から9歳・・・「入門」
- ・10歳
- ・11歳から12歳

■スクール見学

サッカースクール見学では主に5歳から7歳の「目覚め」クラスと8歳から9歳の「入門」クラスの話聞き、重点的に見学した。

○5歳から7歳の「目覚め」クラスの特徴

- ・サッカーを学ぶ。ボールがあつて仲間がいることを認識させる。
- ・サッカーに必要な動作を身につけさせる。(コーディネーション)
- ・サッカーのルールを遊びの中で覚えさせる。
- ・ゲーム要素を取り入れて楽しさを追求。
- ・選手を良く褒める。その気にさせる、やる気にさせる。

○8歳から9歳の「入門」クラスの特徴

- ・ボールを多く触らせる。(W-up から)
- ・ボールスキルを徹底的に高める。
- ・テーマを与え、練習をする。(シュート、ドリブルなど)
- ・コーディネーションを高める。様々な種類をボールトレーニングと複合的に行う。

■まとめと感想：

サッカースクールは選手の質はそれほど高くないものの、とても良くプログラムされていた。年齢ごとに身につけるべき能力が整理されており、トレーニングは年間を通じて計画されているとのことだった。多くの生徒を動かすためにアトリエと呼ばれるステーションを作り、効率よく多くの生徒を指導していた。しかし、あくまでも普及レベルであり、そこを意識してプログラムされていることは明確だった。

(文責 小林公平)

■モロッコアカデミーの3つの柱

アカデミーでは3つの柱を重要視している。①.生活指導 ②.教育 ③.サッカー である。この3つがトータル的にバランス良く保たれるよう心がけられている。

1. サッカーが全てではない

サッカーのコーチがスペシャリストなのは当然だが、学校の先生に対してもモロッコ国内の各教科のスペシャリストを揃えていると聞いた。また、教育だけでなく集団で生活する選手たちの生活指導も行っている。

現在 57 人の選手のうち、7割は厳しい生活環境にいる子供で、全ての子がサッカー選手になれるとは限らない。そのため教育もすごく大事だと話してくれた。サッカーが全てではないこともとても強調されていた。

2. 技術

トップレベルの選手を育成するために、低年齢児は徹底的に技術を教え、それから戦術・フィジカルとステップアップしていく。現在 U-17 代表に 12 人のアカデミー選手が入っている。

3. 最高の環境

グラウンド・・・フルコート 6 面 (天然芝 2、人工芝 4) フリースペース 1

その他・・・トレーニングルーム・プール・メディカルルーム・

寮・食堂・リラックスルーム・学校

スタッフ・・・80名 (選手 57名に対し)

4. OFF の部分の共通理解

技術の部分でボールを扱う技術は当然大事ではあるが、同じようにボールのない時の技術 (OFF) 例えば体の向きやフリーになること等はとても大切で、時間をかけて教える必要があると言っていた。特に日本人がまだ足りない部分とも指摘してくれたことでもある。ヨーロッパで

はサッカーが文化であり、日本のサッカーの歴史はまだまだ浅く、追いつくのに何十年かかるかわからない。しかし 4vs4 だろうが 8vs8 であろうが、11vs11 であろうがサッカーは変わらない。要はボールがある時ない時、何をすべきかを皆が理解しているという事である。

5. メンタル

U-12 年代はサッカーの楽しさが最も重要であり、その中で勝つ喜びでありメンタルの部分で鍛えていく必要がある。どんなトレーニングでももちろんサッカー以外においても、勝者をつけることは大事である。それは、勝ち負けにこだわるようになるためである。

6. 指導者の姿勢

指導者は常に向上心・追求心を持たなければならない。担当カテゴリーのエキスパートになる選手を育てる事を忘れてはいけない。結果だけを求めていたらダメだ。これがラルゲエ氏の指導者育成のキーワードである。・・・「全ては選手（子供）のために」

■まとめと感想

良いサッカーとは、やっていて楽しい・観ていて楽しい・これが良いサッカーであると感じた。モロッコではサッカー選手の育成に国家をあげて行い、最高の施設だけでなく、選手に関わる全ての事に最高の環境で迎え入れ、また選手たちの将来の為の教育までも行っているところに大変感心した。日本との育成における環境並びに施設等の違いにも驚かされた。そして、何よりもラルゲエ氏の話で『1番大事なのは子供だ』と言っていたのが、私はとても心に残っている。

(文責 古杉仁志)

➤ FUS RABATにてオリオTDとのディスカッション(8月25日)

■ベンゼマの育て方

リヨンで長い期間育成に携わり、ベンゼマのような世界を代表する選手を輩出してきたオリオTDとのディスカッションからそのフィロソフィーや育成論、サッカー観についてまとめ、選手育成のヒントとしたい。

1. 長期的視野にたった選手育成が最も大切。

オリオTDは長期的な視野を持ち、選手を育てることが最も大切だと語っていた。もちろんゲームでは勝ちにいくが、ゲームもトレーニングの一環と考えている。現在のチームの中で活躍できる選手を育てるのではなく、サッカーの上手な選手を育てる。そして、結果を出しにモロッコにきたのではなく、選手を育てに来たと断言していた。

2. 指導者とコーチ

指導者とコーチは別物であると語っていた。指導者は良い選手を育てる「教育者」。コーチは結果を出す者。オリオTDは指導者であると断言した。

3. 育成に大切なもの

育成に大切なものは指導のクオリティーと環境である。指導では、ゲームも含めたトレーニングの質をあげ、選手の上達したいというモチベーションを刺激することが大切だと話していた。また、環境で大切なことは家庭である。選手の精神的安定が成長に大きく関わるため、メンタルケアに細心の注意を払っている。

4. 選手の評価

選手評価はトレーニングと日常を中心に行っている。ゲームのみでの短期的な評価ではなく、トレーニングや日常を注意深く観察し、評価するようにしている。

5. 責任は指導者にある

責任の所在を明確にすることで、育成に対する考えを明確にしていた。指導者は選手に対して、常にポジティブで肯定的でなければいけないと強く語ってくれた。うまくなりたい、トレーニングをしたいと思わせることが育成では重要。また、選手は思春期であり、とても不安定である。選手の精神的変化を受け入れ、愛情を持って接し、メンタルケアを心掛けることが重要である。

6. ベンゼマも普通の選手であった

選手の成功は早い段階ではわからない。選手は成長期を終え、筋肉がついてから急激に伸びる。これからもわかるように、サッカーには非常に多くの時間がかかる。そのため、情熱と長期的に考えるフィロソフィーが何より指導者には必要だと強く話してくれた。多くの選手に良いトレーニングを多く積ませる環境が良い選手を輩出することにつながる。

(文責 小林公平)

➤ メレルさんのトレーニング（3月22日[火]）

メレルさん

元フランス連盟 I. N. F エリート選手育成部門最高責任者であり、パパンからアネルカ、アンリ、ディアビーまで、30年間に渡り数多くのプロ選手、代表選手を育てた欧州有数の育成スペシャリストであるアンドレ・メレル氏が2011年静岡県選抜チームの練習を初めて見守った。

■良いサッカーをしよう

メレル氏は、3対3+3のボールポゼッションや8対8+GKのハーフコートゲームを見ながら、攻撃では「ボールを失わずに全員がボールに関わりボールを運び、シュートまで持つていくこと」、守備では「ボールを失った瞬間から強い気持ちを持ってボールを奪い返すこと」を強調していた。育成のスペシャリストであるメレル氏も、普段私たちが選手に身に付けさせようとしているサッカーと同じ絵を描いていると感じることができた。

■静岡県選抜U-16の印象

メレル氏は、静岡県選抜の初日の練習を終えて、「LOOK AROUND ができていない」「オフザボールで足が止まってより良いポジション・体の向きが取れていない」「ワンタッチコントロールでボールを失う・顔が上がらない」といった印象を語った。静岡県のトップレベルの選手を集めた選手たちでさえ、メレル氏の目には個人技術・戦術がまだまだ不十分であると感じさせたようである。この年代を指導する現場に関わる私たちにとって、改めてその大切さと未熟さに気付かされることとなった。

(トレーニングメニュー)

- W-UP 2人1組 動きながらパス交換 (5分)
- ストレッチ (静的・動的)
- 3対3+3 ボールポゼッション (18m×12m)
- 8対8+GK (ハーフコート)

(文責 増田雄也)

➤ メレルさんとのディスカッション（8月24日）

■フランスサッカーの概要

- ・フランス国内のプロスポーツの中で、サッカーが一番人気のあるスポーツ。（女子サッカー人口も増加しており、15歳からのエリートプログラムも発足した。）
- ・プロリーグは、リーグ1・リーグ2（合計40チーム）、観客数は平均2万人以上。
- ・選手の国外流出。（フランスリーグとプレミアリーグでプレーする選手の平均給料を比べると3倍以上の差が出ているため、優秀な選手は国外に出て行ってしまふ。）
- ・ワールドカップでの成績。（1970年メキシコワールドカップ予選敗退。）



以上のような経過から「優秀な選手を育てるしかない」という考えのもと、1990年、INF（国立サッカー学院）が設立された。

■現在の育成年代の概要

11～14歳	アマチュアクラブ	18000クラブ
	クラスサッカー	650チーム

※クラスサッカーとは、日本でいう学校の部活動のようなもの。2003年から「プロジェクト1000」と題して、学校でもサッカーができる環境を整えている。良い点としては、練習時間が増えること。改善点としては、指導者が体育教師であるため、サッカー未経験者が指導している現状が挙げられた。

13～15歳	INFなどの地域ごとのエリート養成施設・プロチームの下部組織
--------	--------------------------------

■INF（フランス国立サッカー学院）について

※32ある前育成センターのうち11が協会のセンター、INFはそのうち最大のもの。13がプロクラブのセンター。8がそれ以外のセンター。INFは16歳から19歳が対象であったが、いまはプロクラブの育成センターの充実により13歳から15歳対象の前育成センターとなった。

（選手の発掘）・・・優秀な選手を集めること。

（保証すること）・・・学業面での保証。保護者との連絡による選手の成長。

（重視すること）・・・技術をしっかりと鍛えること。

※月～金曜日まではINFで生活・トレーニングを行い、土・日曜日は各自の所属チームで試合を行う。（例えば、月～金曜日はINFでトレーニングを行い、土・日曜日はパリSGで試合を行う選手もいる。）

■メレル氏の話の中から得たもの

◇学び続けるということ

サッカーは予測することが難しい。それはプレーにおいてもそうだし、選手の成長についてはなおさらだ。もちろん最善の準備をするし、起こりうるだろうミスについて準備はするが、失敗を繰り返さないことが大切。つまり、「失敗をして学ぶ」ことを忘れてはならない。

◇長期的視野をもった選手育成

パパもアンリもディアビーも、彼らが12歳の時に、15年後の姿は想像できなかった。選手の可能性は無限であるし、誰にもわからない。長期的な指導の計画性を持ち、技術を教え、勝利だけにとらわれることなく選手を育てることが大切だ。

（文責 増田雄也）

➤ メレルさんによるゲーム課題修正トレーニング(8月24日AM)

■モロッコアカデミーU-18対静岡U-16選抜（3-1）

1. 攻撃の継続のためには、簡単にボールを奪われないことが大事。

- ・使うオープンスキルの精度を高める（浮き球の処理 ターン インサイドキック）
- ・ワイドスペースを有効に使う（オフの動き パスの質とタイミング）
- ・自分たちの攻撃ができるためのフォーメーションからフィニッシュ

2. スカウティング

- ・相手との体格差を考えて戦術を（ショートコーナー フリーキックのやり方）
- ・選手個々の2年後3年後の可能性を見据えての個別指導（育成）

※攻撃、守備の内、今日は攻撃に絞ってトレーニングを組み立てていたが、育成という考え方で一貫している。

※夕方にゲームがあるので、軽めの内容（メニューはスタッフが記録しているので略）

■ハリサンジェルマン対静岡U-16選抜（3月29日PM）結果（0-6）

・・・ヨーロッパサッカーに接して

1. コンディションの作り方

- ・メンタル 相手のスカウティングからゲームの予想 テーマ（チーム、個人）
- ・フィジカル 前日午後より1日観光した後のゲーム前のコンディションの作り

2. 4:2:3:1が機能するゲームプラン

- ・攻め方、守り方の相手に対するスカウティング
- ・機能しなかった場合の変更（システムの変更 選手の変更 戦術の変更）

3. 今後への課題

- ・選手個々の課題について、選手個人に対してだけでなく、戻って指導を受ける指導者に対しても、報告し成長の一助にする。

4. ハリサンジェルマンU-15から学ぶこと

- ・よく周りを見て予測・判断し、多くの選択肢から、最適なプレーをしていた。
- ・パスアンドムーブからシンプルな攻めで数的優位を作っていた。
- ・全員がハードワークしダイレクトパスでスピードをあげていた。
- ・球際での競り合いに気迫があり、体格差にかかわらず強さがあった。

（文責 岡田秋人）

➤ ナセル・ラルゲェ氏とのディスカッション（3月28日[水]）

■論理的評価・指導「なぜならば」

「コーチは、選手を評価するときに「なぜその選手は良いのか、または悪いのか」を論理的に説明できなくてはならない。アカデミーでは、選手の評価に「カルテ」を導入している。カルテの大項目は4つで、技術・戦術・メンタル・フィジカルに分かれている。さらにそれぞれに細かく小項目がいくつもあり、選手を常に評価し、選手にも示している。選手の評価を、抽象的ではなく論理的・具体的に行っている。」

普段私は、そこまで選手を見ることができているだろうか？選手にとっては自分が唯一のプロコーチ。その言葉が、また強く頭を駆け巡った。

「また、選手を指導するときにも、選手への「納得」と「論理」が最重要課題となる。どんなに優れたトレーニングメニューであっても、選手が納得して取り組まなければ練習効果は期待できない。逆に、どんなにシンプルなメニューであっても、厳しいトレーニングであっても、「その練習をなぜやるのか？」という論理付けがしっかりとしていれば、選手は納得するはずである。」

■テクニク（技術）とは何か？！

テクニックとは、単なるボールさばきだけではない。ステップ（体の向き）・LOOK AROUND・パス&ゴー…すべてが含まれる。

■より良い指導者となるために・・・ナセル・ランゲの考えるよい指導者

- ①向上心（学び続ける）
- ②担当する年代での指導のエキスパートであること（研究者と同じで、より深い理解と知識、そして経験が必要）
- ③常に自分の指導に疑問を持つ（選手が自分の指導に「納得」しているか？が大切なところ・子供の将来は見分けられない）
- ④選手を育てる（個人を成長させることが、チームを成長させる）

■ナセル・ランゲの考えるよい選手

技術がある。持久的能力。フィジカルの強さもしくはスピード、あるいはその両方。コンパティティブ（競争心、勝利への欲求）

（文責 増田雄也）

➤ プレティニ VS レンヌ TA （U-17 フランス地域リーグのゲーム）

このゲームは日本のどのレベルに相当するかは不明であるが、この試合にあったものとなかったものを中心にまとめてみたい。そこから、その背景を考察する。

■存在したもの（あったもの）

1. 芝のグラウンド

フランスではいたるところに芝のグラウンドがみられた。この試合が行われた会場もスタンド付の芝のグラウンドである。パリ市内だけでも1日に3,000試合が行われる。その数だけグラウンドが存在する。また、審判員も派遣とのことだ。

2. 観衆

地域リーグの試合であるが、観衆がおり、売店もあった。しかし、日本でも多少の観衆は存在する。この試合のレベルや規模が明確でないため、観衆の数を一概に評価できない。しかし、売店があり、気軽に地域の人たちが観戦している姿は日本にはない。

3. コーチの情熱

ベンチにいるコーチからは情熱を感じた。情熱をもってピッチに立つ指導者がこのゲームだけでも二人いた。（両チームにいたということ）一日にパリ市内だけで3000ゲームあるとすればそのコーチの数は単純計算してもかなりの数になる。サッカー文化を支えているのはこういった環境だろう。

■存在しなかったもの（ないもの）

1. 技術

技術はそれほど高くはなかった。ボールスキルはそれほど高くはなく、サッカー自体も淡泊であった。どのくらいのレベルのゲームか確かではないが、フランスの空気を吸っているからサッカーがうまくなるわけではないことがわかった。

2. タレント

タレントはいなかった。視点を変えれば、U-17年代ですでにタレントはスカウトされているのではないだろうか。PSGにはタレントはいた。発掘のノウハウがタレントを埋もれさせていないと考えることもできる。

8. コーディネーション

コーディネーションは高くない。スピードとパワーは感じるが、敏捷性や柔軟性は日本の同年代のほうが高いと感じる。学校体育が盛んでないフランスではクラブでこの能力を高めなければ身につかないという背景があるようだ。

(文責 小林公平)

➤ 試合分析：試合：静岡U-16対パリ・サンジェルマン（0-6）

■目的

16歳以下の静岡県を代表する選手たちが、同年代のパリSG相手に全く歯が立たなかった原因を、個人のプレーに焦点を当てて分析・考察し、これからの指導に生かす。

■報告対象

16歳以下サッカー指導者

□試合の流れ

終始相手にゲームを支配され、完敗した。試合開始から、静岡県選抜の選手は、相手選手・チームに必要以上にビビってしまい、気後れしていた。球際でことごとく競り負けた。

開始早々の失点で、さらにプレーが消極的になって失点を重ねた。前を向ける状況でもターンできない、仕掛けるべき場面でバックパスに逃げってしまう、オフザボールでボールに関われない、走れないといった場面が何度も見られた。

選手交代やハーフタイムでも状況は好転せず、相手ボールをただ追い回すだけで試合終了を迎えるという遠征最後にしては何とも寂しいゲームとなってしまった。

□課題の発見と分析

◇ボールを奪えていたか？！（守備）

パリSGの選手は球際で静岡の選手から何度もボールを奪っていた。逆に、静岡の選手は、ボール移動中のアプローチが遅く、相手にプレッシャーをかけるところまで行っていない。また、奪えるチャンスで奪えていない状況が何度も見られた。パリSGの選手が何度もファウルを取られ、静岡の選手はほとんど取られなかったのがそれを象徴していたように思う。

◇（攻撃）技術が通用していたか？

前を向ける状況でもターンできない、仕掛けるべき場面でバックパスに逃げってしまう、ファーストタッチでのボールの置きどころが悪くボールを失う、オフザボールでボールに関われないといった場面が何度も見られた。

□提言

静岡県選抜の選手は、いつもと違う環境（相手選手・グラウンドなど）の中で、自分の力が発揮しきれたとは言いがたい。この試合においては、試合への入り方を含め、メンタル面に大きな問題があったと言わざるを得ない。しかし、それを抜きにしても、試合の中で生きる技術ということに関してはパリSGの選手とは差があったと思う。

つまり、それはプレッシャーの中で発揮できる技術のこと。ノープレッシャーならば周囲がよく見え、ボールを受け、正確にボールを置き、しっかり蹴れる選手でも、プレッシャーが厳しくなると技術がぶれてしまうのは、どのレベルの選手であれ同じ課題である。

指導育成に関し今回研修で学んだことは、低年齢からの反復練習による質の高い技術（技術のとらえ方を明快にして！）を習得させる大切さと、真剣勝負の場（質の高いゲーム）をいかに設定しその中で生きる技術をもって戦える選手を育成することだと考える。

(文責 増田雄也)

試合分析： U-16 静岡県選抜 VS FUS RABATO (2 - 1)

■目的・意図

国体への強化を目的としたU-16 静岡選抜のゲームを分析することで、U-15 年代の課題とこの年代までに身につけさせたい「技術」について、攻撃を中心に分析・考察し今後の指導に活かす。

■報告対象： U-15 年代の指導者

□流れおよび全体像

勝利したものの、チームの目指すサッカーとゲーム内容とのギャップにジレンマを感じる。チーム全体としても個人個人においても静岡選抜のほうが地力で勝る相手に対し、勝利したものの課題を残す結果であった。とくに、ボールを扱う技術は静岡選抜のほうが上回るが、ボールを失うシーンが目立った。U-16 静岡選抜の目指すスタイルとゲーム内容に少なからずギャップが生じているように感じた。

□課題の発見と分析

◇U-16 静岡県選抜の課題…多くみられたボールを失うシーンとコーチングから考察

前線に攻め急ぐことで、ボールを多く失っていた。ダイレクトプレーやファストブレイクは現代サッカーにおいて欠かせない戦術ではある。しかし、ベンチからのコーチングでは「落ちつけ」、「繋げ」といった指示が出ていたことから、選手が意図をもってこの攻撃を組み立てていたとは考えがたい。

◇課題分析→原因は「技術」不足？

チームの目指すサッカーができず、U-16 静岡県選抜の選手がこのゲームでボールを失う頻度が高かったの「技術」が低いからであるか？

◇課題分析に対する考察

総合的に Yes であるが、一部 No でもある。考察を進める前に「技術」に関して定義したい。モロッコアカデミー所長のラルゲエ氏は「技術とはボールコントロールをさすだけではなく、オフの動きや効率良くする術などのすべてをさす。」と話していた。この言葉は改めて、「技術」が高いとは球捌きが上手ではなく、サッカーが上手であることだと気づかせてくれた。[技術]が高い=ボールスキルが高く、サッカーを知っている=サッカー(ゲーム)が上手]

ボールを扱う技術に関しては多くの選手がそれほど低いとは感じない。むしろ、高いと感じる選手もいる。ボールスキルはこの問題の大きな原因ではないと考える。しかし、オフの動きや効率よくプレーするための個人戦術といった「技術」不足がこのような結果を招いたと考える。

攻め急ぐ傾向が強かったのは、個人のボールスキルではなく、パスコースの少なさに原因があるように感じた。ボールの受け手も相手をタイミング良くはずすことやスペースを見つけ出すことができなかった。パスコースが少なく、限定されやすい。その結果、安全性の高いロングパスを選択する。もしくは、スピードを上げ、意図なくドリブルでボールを運ぶシーンが目立った。また、多くの選手がとにかく前線に飛び出すことを繰り返した。これも攻め急ぎの原因であったと感じる。メレル氏もしきりに、サポートをしろや広くピッチを活用しろとオフの動きについて改善を促した。そのうえで、「落ち着け」、「あわてるな」と指示を出していた。

□提言

1. 「技術」とは何か？当ふり前に語られる「技術」をもう一度考え、身につけさせたい。

U-15 年代では技術をしっかりと教え込む必要がある。これは誰もがわかりきっていることだ。しかし、ゲームに必要な「技術」が身についているか？もしくは教えられているか？

もっといえば「技術」とは？をもう一度見直す必要がある。「技術」が高い＝サッカー（ゲーム）が上手だということを再認識する必要がある。また、トレーニングがサッカーではなければ決してサッカー上手にはならない。「技術」と「ゲーム」をトレーニングの中核におき、長期的に育成することが重要ではないかと思う。身につけた「技術」をよりゲームで活かす「技術」にするためにトレーニングを構築することが大切である。

2. 勝利も育成も大切。長期的視野をもち、良いサッカーをして勝つことを目指そう。

「育成」と「勝利」を切り離し、「育成」というワードを都合よく使う結果、ゲームに必要な「技術」が身につかないのではないか。その逆も然り。ボールスキルはもちろんサッカーに欠くことのできない最も大切な能力のひとつだ。しかし、U-15年代ではその「技術」をより、ゲームに活かせる「技術」にしていかなければいけない。ゲームに必要な「技術」を身につけさせれば必然的に勝利は近づく。「技術」をバーチャルなものではなく、より現実的なものととらえることが必要ではないかと思う。また、攻め急ぎやリスクを恐れる傾向は、選手の成長を急ぐ、もしくは目先の勝利に指導者がとらわれている結果だと思う。選手の課題やミスを指導者がどういった視点でとられ、改善策を講じ、個人を伸ばすことが重要であると考えられる。これには粘り強さと長期的視野が欠かせない。数日で「技術」が改善できれば、みんながジダンになれてしまう。「常に良いサッカーをして勝利しよう。」これが育成年代のあるべき姿だと改めて感じた。

(文責 小林公平)

➤ 試合分析： U-16 静岡県選抜対 PSG (パリサンジェルマン) 0-6

■ 目的・意図

国体への強化を目的とした U-16 静岡県選抜のゲームを分析することで、U-15年代の課題とこの年代までに身につけさせたい「メンタリティー」について PSG の選手と比較して考え、今後の指導に活かす。

■ 報告対象： U-15年代の指導者

□ 流れおよび全体像

終始圧倒され、なす術がなかった。前半立ち上がりに失点し、その後もゲームを支配され続けた。なす術なく大敗した。

□ 課題の発見と分析

U-16 静岡県選抜の課題…精神的、心理的に戦う準備はできていたのだろうか!?

◇ 課題分析・考察

メンタルの問題を課題としてあげるのは、あまりにもロジカルではないと思う。しかし、そうせざるを得ない現実が目の前にあった。多くの場面でコンタクトすらなく、後手に回っていた。後ろ髪を引かれるようなプレーがあまりにも多かった。フィジカル面で差があったものの、相手に自由にさせないという気迫と恐れずに向かう姿勢があれば、結果はもう少し違ったものになっていたと感じる。毎試合が生き残りのテストの場である PSG の選手に対してあまりにも無防備であった。その結果ゲームへの準備ができておらず、明確な意思統一なく受身のままゲームに入ってしまったようにみえた。

□ 提言

選手をその気にさせる

勝者のメンタリティーを育てよう。この言葉で片付ければあまりにも簡単であるが、これ

は非常に難しいことだ。何不自由なく暮らせる日本で、絶対に生き残るというハングリーさを求めることは難しいと思う。しかし、環境の違いを言い訳にしては、いつまでたっても世界には追いつかない。そこでその原因を指導者に見出し、日本全体（静岡全体）で取り組むべきだと思う。選手をその気にさせる演出（トレーニング、ミーティング）や環境（骨を削るゲーム環境）、雰囲気づくり（プライド、チーム愛）に力を注ぐ必要がある。簡単でないことは承知である。しかし、一人ひとりの指導者の取り組みがサッカー文化を育て、勝者のメンタリティーを育てるのだと思う。今、目の前の選手を改善することが、長期的にみたときの近道だと考える。

（文責 小林公平）

➤ 試合分析：U-16 静岡選抜対モロッコアカデミー（1-3）

■目的

静岡らしいサッカー・見て楽しい、プレーして楽しいサッカーの追及

■報告対象：静岡県4種指導者

□試合分析

パワー、スピード、フィジカルが上のモロッコに対してのU-16 静岡選抜はどのように戦うか見ものであった。試合は開始当初よりパワー、スピードがあるモロッコ選手に圧倒されボールを奪えず、奪ってもすぐに奪われてしまう展開となった。ボールが前線に運ばず防戦一方といった展開の中、静岡選抜センターバックの選手のミスにより1点を奪われてからはモロッコ選手の連動性、俊敏性について行けず、前半で3失点してしまう。

後半に入り、モロッコ選手がメンバーを入れ替えてきたが、なかなか静岡のペースには持っていけなかった。唯一の得点シーンはこの試合の中で評価できる点であると思う。

□静岡の課題

◇ゴールを奪う為にどのようにボールを運ぶべきか

まず、ボールを持っていない選手のサポートのタイミングが遅い。ボールが入ってからサポートに入る事が多く、プレッシャーの早いチームには通用しない。この事からこのゲームでワンタッチプレーは多くなかったと思う。ワンタッチが全て良いとは思わないがサポートのタイミングが遅いという現象の現れであると思う。また、3人目、4人目の係わりが少なく、サッカーに連動性がない。その為、その場しのぎのパス、コントロールが多くボールをゴールまで運べないと感じる。その事に追記して3人目が連動していてもサポートをする選手のスピードアップ、タイミングも全く悪く感じた。サポートの質、タイミング、人数が揃わないため、結局トップの選手にロングボールを当てるしかなく、意図のないゲーム展開であった。

□このゲームより学ぶこと

◇ボールを持っていない選手の試合へのかわりを意識高く持たせる。

◇ただ単にボールを動かすのではなく、ゴールを意識したサポートを意識する。

◇スピードアップのタイミング、質を事細かく意識させる。

4種年代では上記の事は日頃より指導者がサッカーを理解しトレーニングを行うことが大事だと思う。4種年代の選手には指導者のコーチングでプレーが変わってくる事が多いので事細かく指導をして欲しいと思う。

（文責 本田忠勝）

➤ 試合分析：フランス代表対クロアチア代表（0-0） [3月29日]

■目的：

ヨーロッパトップリーグで活躍する選手のプレーを現地で観戦し、特に「個」に焦点を当てて、なぜ彼らが世界のトップレベルで活躍できるのかを分析・考察し、これからの指導に生かす。

■試合の流れ：

序盤からフランス、クロアチアともに中盤でのボール支配を高めゲームを支配しようと試みるが、クロアチアの運動量が勝り試合を優勢に進めた。対するフランスは、ホームの声援の後押しもあり、徐々にボールポゼッション率を高めていった。特にMFナスリ（アーセナル）は質の高い技術、後半途中から入ったMFリベリ（バイエルン）の左サイドで見せた突破力とゴールへの意識の高さは特筆すべきものだった。試合は、互いにボールはキープするものの、ゴールに向かうプレーには迫力が欠け、決定機やシュート数自体も少なくスコアレスドローに終わった。

□課題の発見と分析・提言

◇ナスリ(フランス代表)の凄さ、ナスリのプレーから学ぶこと

①フリーになってボールを受けられる技術があること。

(周りをよく観る・プレッシャーを受けないポジション取り・動き方のテクニック)

②ボールを正確に置く技術があること。

(ファーストタッチで相手に奪われず次のプレーに移行できるボールの置き方・ターン)

③ボールを正確に蹴れる技術があること。

(プレーの大半はインサイドキック・パススピード・パスを出すタイミング)

◇技術とは何か？！！

つまり、私たちがより良いサッカーをするために普段選手に要求していることと何も変わらない。それがどの環境（相手のレベル・グラウンドの状況）でもできるかが重要である。

技術というと、単にボールさばきのこととして捉えがちであるが、トップレベルの選手を知れば知るほどそうでないことがよくわかる。良いプレーをするには、良い準備をすること。周りを観る・良い体の向きをとる・ボールに寄る・パス&ゴーといった個人戦術といわれる部分をもっと技術と結びつけて考えられるべきことであると感じた。

モロッコアカデミーでは、守備のプレス練習のときに、スタートを切る選手に必ず足踏みをして素早くダッシュできるように、そこまで細かく準備の重要性を指導していた。良い技術とは何か？もう一度、指導者が捉えかたを整理し、選手を指導していかなくてはならない。

◇スペシャリストの育成

リベリは他の選手とは明らかに違う「個」の能力というものを見せた。試合終盤は、ナスリとリベリの2人だけでクロアチアDF陣を切り崩し、シュートまで持っていく場面も作った。リベリは、左サイドでボールを受けると、他を圧倒するスピードを生かし相手DFをドリブルで突破しシュートやクロスまで持っていく。他の選手とは明らかに異なるプレースタイルだが、実際にリベリが入ってから得点の予感が増したし、スタンドもそれを期待していた。日本の高校生の試合では、このような特徴をもった選手を見る機会は少ない。Jリーグを見ても宮市は海外へ行ってしまったし、名古屋の永井ぐらいかもしいない。特に個人の能力（スピード・高さ・強さ）に優れた選手は、ポジションに特化したトレーニングを与え、育成していかなくてはならない。（どのレベルであっても。県選抜・強豪校・掛川工業高校）

(文責 増田雄也)

➤ 試合分析：国際親善試合観戦 フランス代表対クロアチア代表（0－0）

■目的・意図

フランス対クロアチアのゲームから「技術」について、攻撃を中心に分析・考察し今後の指導に活かす。

■報告対象： U-15年代の指導者

□流れおよび全体像

得点こそなかったがハイレベルな技術や駆け引きがあった。終始フランスが試合を支配するものの、どちらのチームもリスクを回避し、動きの少ないゲームであった。しかし、その中でも、技術やタレント性を感じることができた。

□トピックス

◇日本人が学ぶべきところ

フランスのナスリやクロアチアのモドリッチは日本人と体格がそれほど変わらず、フィジカルも特出して強いわけではない。しかし、このゲームやCLなどでも世界のトップチームの中心として活躍している。その理由を探し、今後の指導に活かしたい。

◇シンプルに淡々とプレーするすごさ

ナスリ、モドリッチは実に淡々と飄々とプレーしていた。プレッシャーがそれほどきつくないように見えてしまうのは、彼らがそれをいなす術をもっているからに他ならない。国際Aマッチ、ましてやこのカードでプレッシャーがないわけがない。彼らのプレーはまるで地雷原を悠々と遊ぶ少年のようだった。

彼らは実にタイミング良くボールを受けていた。それを手で扱うかのようにコントロールし、正確にボールを蹴った。しかもそのプレーに派手さはない。単純な動作を正確に素早く繰り返し行っているようにみえた。基本に忠実で効率よくサッカーをしている。簡単に言ってしまうとサッカーがうまい。よく観ているからこそフリーになり素早く、正確にプレーできる。ボールを正確に扱う技術が高いからスムーズに思い通りのプレーができる。サッカーの原理原則が体に染み付いているからこそ、効率的にプレーできるのだと思う。

◇ナスリ、モドリッチを育てる

ナスリやモドリッチがあのようなプレーができるのはヨーロッパで生まれ、ヨーロッパの空気を吸って育ったからなのか。文化やアイデンティティーや民族性が関わっていることは確かだと思うが、彼らが小さな頃からサッカーを学び、個を伸ばしてきたからに他ならないと思う。日本でもあのようなプレーをする選手を育てることは不可能ではない。選手を良くみつめ、良いトレーニングをし、選手個人を伸ばす。そして、良いサッカーを目指し繰り返しが彼らを生むと思う。指導者にかかる責任は大きい。

まずは目の前の選手をしっかりみつめ、成長させたいと思った。良いトレーニングを積み選手の数を単純に増やすことが、彼らを生む方法だと思う。

（文責 小林公平）

